

せきさい  
 粛々と春季

## 復元された「四配の像」もお披露目



新緑があざやかな多久聖廟で4月18日、春季釈菜を執り行いました。今回は、ふるさと応援寄附によって復元が実現した「四配の像」のお披露目と安置式もあり、約60年ぶりに創建当初の弟子が孔子像のそばに安置。2008年に修復された孔子像とともに、5体が揃った前で伝統をつなぐ厳かな釈菜となりました。

▲配置式では横尾俊彦市長が「今日、四配の像を収めることにより改めて300年前創建当時の想いに立って、これからの多久聖廟とこの文化や伝統を次代につないでいきたい」と、集まった人々に思いを語りました。

▼新たに聖廟に安置された四配の像。  
 (左から孟子、曾子、顔子、子思子)



この像は、富山県高岡市の作家・田畑功さんが制作した高さ約40cm、重さ約15kgのもの。残っていた写真や絵図等を頼りに、忠実に復元されています。

なお、陶製の「四配の像」は今後、多久市郷土資料館(西溪公園内)に展示の予定です。

釈菜は孔子の遺徳をたたえて感謝し、丁重に供物を献じる儀式です。創建以来300年以上続く祭事で、県の重要無形文化財に指定されています。今回は、儀式に先立ち、復元を終えた四配(顔子・曾子・子思子・孟子)の像をみなさんにお披露目。昭和26年に孔子像の装飾品の一部とともに盗難に遭い、唐津焼で作られていた4体が約60年の役目を終え、元の青銅製の四配が孔子像の近くに安置されました。

献官の横尾市長や市議会議長、教育長、小中学校長などの祭官によって無事、安置し終えると、孔子像と4人の弟子像に餅や甘酒などお供え物を奉げ、最後には各地から寄せられた漢詩も献じられました。儀式が終ると聖廟境内では、あでやかな衣装を身にまとった西溪中学校の生徒が『釈菜の舞』を披露。市在住の音楽家・趙勇さんが奏でる揚琴の音色にあわせ、300年祭で復活した『参列生徒の唱歌』を中部小1〜5年生と多久町老人会のみなさんが合唱し、仰高門手前では、中部小6年生が『腰鼓』をリズムよく披露しました。

## 市長コラム

### 温故創新

Message for Citizen

#### 孔子の四人の弟子達の復活

4月18日の多久聖廟の春季釈菜は特別であった。孔子像とともに廟内に並ぶ四配像が元々の姿に復元され、安置式を行ってからの祭典となったからだ。四配とは、顔子、曾子、子思子、孟子で、孔子の代表的で有名な4人の弟子のことである。この中で孔子から直接の薫陶を受けたのは顔子と曾子である。

顔子は孔子が最も慕った弟子の代表格で、その死去に際して孔子は「天がわれをほろぼせり」とさえ落胆し涙したと伝えられている。曾子は『論語』にも『孝経』にもその名が出るし、それらの書物の編纂に大きな働きがあったといわれる。子思子はなんと孔子の孫にあたる。まさに孔子が大いに愛おしく思う存在だったはずだ。孟子は孔子の没後かなり経過して登場した人物だが、日本ではその教えを記す『孟子』とともに有名であるし、吉田松陰先生なども尊重された師でもある。

安置式での市長挨拶では『孝経』について触れた。この教本は儒学の入門書のひとつで、初学の者は必ず学んだ。藩校でも基本書だった。しかも、中国の唐代には玄宗皇帝から「一家に一冊置くように」との勅命も出たし、奈良時代の日本でも同様だった。基本の教えの尊さに高名な皇帝も注目した。その教えは、時代を超えて今日にも通じる、含蓄深いものがある。

人として己を磨き、持ち前の天分と徳性を伸ばして世に役立つように生きなさい。それがあなた自身にも、世の中にも良いことになる。親に直接の孝行を努めることも大切だし、世に役立つ生き方で世に知られて評価されることも大事な孝行になる。そんなメッセージが簡潔に凝縮されている。この教えは、論語や大学などの古典をも貫くものである。そんな基本の基本ともいえる教訓を、私達は自分の心に刻むとともに、子どもたちにもしっかり伝えていかねばならない。(俊彦)